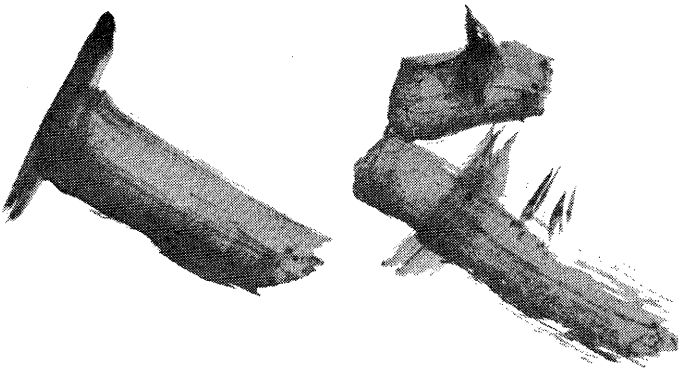


第三〇号

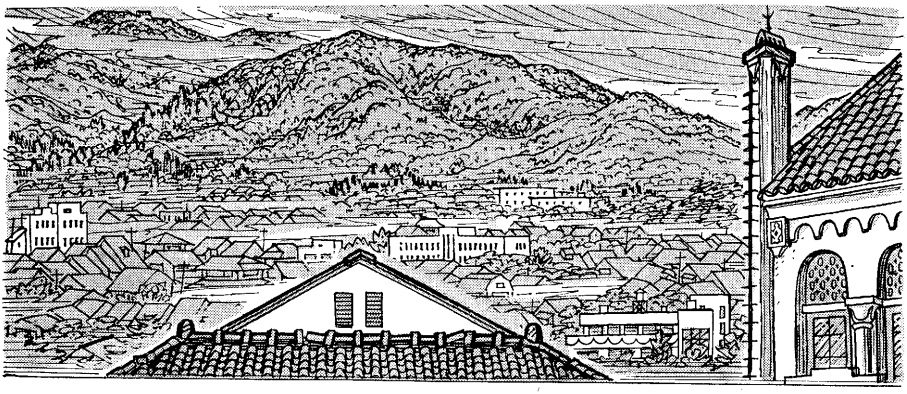
1984

京都大学人文科学研究所

ISSN 0389—147X

東方部川勝義雄教授は、かねて病気療養中のところ、去る四月四日午前九時四十五分逝去されました。享年六十一歳でした。

次いで、五月二十日午後二時より三時半まで、研究所主催の追悼式が本館大会議室においてしめやかに行なわれ、沢田総長以下六名の弔辞奉読、弔電の披露、御遺族代表の挨拶に引き続き、故人のご冥福を祈つて、参列者全員が献花を行ないました。



人　文　第三〇号

1983年12月——1984年5月

もくじ

追悼 川勝義雄教授……2
哀悼の辞……林　巳奈夫
弔　辞……谷川　道雄
哀悼の辞……気賀沢保規

随想……8
時　鐘　書……吉田　光邦
大学における男女雇用の平等……小野　和子
どうぞよろしく……岩熊　幸男

講演……14
退官記念講演
論理から国家へ……上山　春平

本のうわさ……16
浅田彰『構造と力』及び『逃走論』（井上）
中村賢二郎『都市の社会史』（横山）

共同研究の話題……20
"DATE" と「デイト」……浅原　達郎
場面行動の通文化比較……谷　泰

旅……22
フランスの旅……竹内　実
襄樊行……吉川　忠夫
袖下の失敗……ピーター・コーニッキー

書いたもの一覧……27
叙位叙勲・訃報・人のうごき（18）・外国人客員教官・招へい外国人学者・外国人研修員（19）・おくりもの（25）・お客さま（26）

哀悼の辞

林　巳奈夫

川勝さん……先輩をなれなれしく呼ぶことをお許し下さい。私はいつも忘れて川勝さんを少しだけ年上と思ひ、こう呼んでいました。大正十一年のお生れだったことは、お亡くなりになって始めて正確に覚えたことでした。確かに川勝さんは私より年上で、いつも私の少し前を歩いておられました。大分前のことでした。食事の後で楊子を使いながら、この頃年で歯の間が空いて来てしまって、と言われました。私も歯の間に何でもないものが挟まるようになったのは、その後何年か経ってからでした。川勝さんが小さい字を見るのに、ポケットから老眼鏡をとり出され、この頃小さい字が見えにくくなって、と照れくさそうにかこたれたのは、何時のことだったでしょうか。いつの間にか私も老眼鏡を持ち歩くようになっております。

一昨年の八月、夏期講座が終って、研究所も人影がまばらな時分でした。川勝さんが何かちょっとした連絡のために研究室に寄って下さいました。本館から歩いて来られたというのですが、ひどくへばったような御様子で、その時は、私も何年か経つと、あれ位の所を歩いてあんなにへばるようになるのかな、と思ったことでした。川勝さんの容易ならざる御病状を知らされたのは、その後幾らも経たない時のことです。後で思えば、あの時は既に病魔に冒されておられたのだと思います。一体何ということでしょう。他人も本人も気がつかない間に、病魔につけ入られてしまうとは。

川勝さん、御存命中には申上げそびれてしまいましたが、私は時に川勝さんの論文を読ませていただいて、川勝さんを歴史家として尊敬しておりました。誰もがおしたい申上げるあの温厚な御風貌、大人の風のある身のこなしの川勝さんの口から、透徹した人物評価、重要なポイントを突いた事態の把握、素早く適確な判断のお言葉をうかがい、はっとさせられたことが幾度あったことでしょう。これは川勝さんが研

究所の中にあっても、本質的に歴史家として生きておられたことだと思います。「歴史家」とは常に史料をにらんで、その時代の社会の動きをいかに認識すべきかに心をくだく者の意であります。

人文研生えぬきの古参、人文研東洋史の長老でもあったこの川勝さんに、体を反らせばいつもそこにある背もたれのようなつもりで、安心して寄りかかって、長年過して参りました。川勝さんには合計五年もの間、東方部主任として御苦労いただきました。随分と御迷惑だったことでした。川勝さんには不本意だったかも知れませんが、生憎と名主任でありました。

このようなことは然し、所詮所内末梢の俗事に属することです。川勝さん、ほんの少しだけ先輩だったからよくわかります。本業の御研究の方で、まだまだ仕残された御仕事が山ほどあったはずです。思いもかけぬ御病気、そしてやはり避けられなかった死の訪れ。どんなに御無念だったことでしょう。

川勝さん、もし霊があったら聞いて下さい。川勝さん、残念でした。

昭和五十九年五月二十日

弔辞

谷川道雄

川勝君

あなたが我々の手の届かない所に逝ってしまってから、七週間経ちました。僕はあい変らず、あなたがよく訪ねて来てくれた家からバスで学校に通っています。そのバスでもよくあなたと一緒になったものですが、今はもう会うこともありません。あなたが主宰して来られた研究所の中国貴族制社会の研究会に出てもあなたの姿を見ることはなく、火曜日の午後、文学部でのあなたの講義の時間は、ひっそりと空いたままです。五年半前に京都に移って来て、あなたと又一緒に新しい勉強をやってゆこうと思っていたのに、その望みはもはや永久に絶たれました。日常生活の表面は以前と変らないのに、気持の底に横たわる空虚さは、どうにも埋めようがありません。

おもえば、あなたとの出会いが僕の研究生活に決定的な性格を与えました。学生時代も親しい間柄ではあったけれども、あなたとの本当の出会いは卒業後十年以上経ってからでした。あなたは人文科学研究所の助手、僕は名古屋大学文学部の助手と、職場を異にして研究を進めていました。あなたは後漢末・魏晋時代から南朝へ向い、僕は隋唐から遡って北朝のことを考えていました。一九六〇年前後の時期、我々はちょうど同じ時代の南朝と北朝に立ち向っていたのでした。そして期せずして同じ様な問題関心に達していたのです。そのことが判って、二人だけの研究会が始まりました。まだ新幹線も開通していない頃、交互に京都と名古屋のそれぞれの家に泊りこんで相手の前で研究発表をするということが続きました。あなたはよくこの研究会のことを、お互いに尻を叩き合って、と言っていました。生活的に不安定であるだけでなく、研究者としての自己を確立すべく必死にもがいていた当時の僕にとって、これほど大きな支えはありませんでした。あなたにとってもあの頃は、色々な意味で苦しい時期であったに違いありません。

二人だけの研究会はその後我々の共通の師である宇都宮清吉先生を中心に、中国中世史研究会へと発展しました。発足してから十年後に刊行した研究成果は、学界に少からぬ波紋を投げかける結果となりました。我々の中世論はまた、諸外国の研究家の間にも、関心を喚び起したのでした。しかしそれらのことよりも、今年の一月の例会のことを想い出します。身体が大事だから今日は休んだら、と言っていたのに、やはりあなたは会場の京大会館までやって来ました。これが最後だという気持で出て来てくれたことが、僕にも判っていました。

あなたの研究上の主題は一貫して六朝の貴族制社会を世界史上の中世封建社会との対比で把えようとすることにありました。そしてあなたは『六朝貴族制社会の研究』で、この課題を見事に解いたのでした。豊かな学才に恵まれたあなたが心をこめて書き綴って来たこの香り高い作品集は、凡百の中国史研究の水準をはるかに越えて、これからも長く、心ある研究者たちのこよなき指針となるでしょう。世界の東洋学界においても、疑いなく第一級の業績です。

平明にして抒情的でさえある美しいあなたの文章を追ってゆくと、なぜあなたが上述の事柄を主題とし

たかが伝わって来ます。中世封建制を成り立たせている個人と個人の、誠実義務に基づく結びつきを、あなたは血なまぐさい六朝史の中に求めています。形式としてはあくまで皇帝支配下の官僚制社会でありながら、内実においては、人びとは自分の信頼し得る者におのれの人格を託して生きていたのでした。あなたは人間を究極においてそのような自由な存在と見ていました。中国でも決してそれは例外ではないというのが、あなたの強い確信でした。儒教的立場からすれば異端である道教に深く魅かれ、貴族制社会の形成における世論の機能を重視し、また司馬遷らの歴史家たちに強い共感を抱いたのも、すべてあなたの中に生きてはたらく自由の精神によるものでした。戦中・戦後の世の中は、自己の魂と共に歩む者にとって、決して風通しのよいものではありませんでした。そのなかにあって、人間の自由を確信し、それを根拠として多彩な研究を創出してゆくあなたに、僕はいつも心を打たれ、自分の励ましとして来ました。その支えなしに自分の研究もあり得なかったことを、いま改めておもうのです。

あなたと言い争ったり、はげしい議論を交わしたりしたことは一度もありませんでした。いつもゆったりと話していて、それがお互いの共感となって高みに昇ってゆくのでした。しかしもうあなたの言葉を聞くことはできません。自分の中であなたとの対話を続けるほかはありません。このようにして、あなたは我々のなかに生きています。

これが、声に出していうあなたへの最後の言葉です。川勝君　ありがとう。

一九八四年五月二十日

哀悼の辞

気賀沢保規

京都大学人文科学研究所教授・川勝義雄先生の追悼式にあたり、先生よりはかり知れない御恩顧を受けたものの一人として、御逝去を深く悲しみ、ここに哀悼の辞を述べさせていただきます。

私が川勝先生に最初にお目にかかったのは、一九六六年、先生が初めて文学部で担当された講義におい

てでありました。あのとき、二年間にわたるフランス留学から戻られたばかりであった先生は、少壮気鋭の研究者として私たちの前に立たれ、後漢末から東晋期に至る中国貴族制の形成と展開、およびその構造という、いわば先生の御研究の核心をなす問題について、情熱こめて講じられたのでありましたが、そうして浮き彫りにされる中国史の世界に、当時まだ学部の学生であった私は、新鮮な驚ろきのなかで強くひきつけられ、中国史を勉強することの喜びを味わったのでした。それ以来、私は、教室の場だけでなく、研究会や研究室等の席で、また個人的にも、厳しくしかも温情溢れる先生の御指導を仰ぐことになりました。思えば、そうして先生のお側で、二十年近い歳月を送ったことになるのです。

そうした永い年月のなかで、先生についてとくに印象深く思っていることを語るとすれば、それは何よりもまず、あの六十年代末のころのことに言及しないわけにはまいりません。あの時期、若者たちの激しい行動によって、大学を中心に全国が大きく揺れ動き、大学人は何らかの形でそこに関わることになったわけですが、そうした状況において、先生は、かれら青年たちの行動の意味するところを、自らの研究対象とされる後漢末期の動乱と重ねあわせ、ある種の共感をもって眺めようとされていたように思われます。あのような深刻な事態にあって、なおかつ知的関心を失うことなく、柔軟にして余裕をもって対処されるお姿に、「乱世の逸民」を自任される先生の面目躍如をみる思いがし、人間的な大きさ、魅力を感じさせずにはおきませんでした。

先生はまた、下宿生活をしていた私のためにしばしば御自宅にお食事に呼んで下さいました。あのやや古びた吉田中阿達町のお宅の一階三畳間のお部屋で、奥様お心づくしのお料理に舌づつみをうちながら、学問研究のことから始まって、先生の生い立ち、多感であった学生時代、戦後混乱期における物心両面にわたる御苦労、など様ざまなお話をお伺いして、時の経つのも忘れたこと、それは決して忘れえぬ愉しい思い出であります。そうしたなかで話題がフランス留学時代のことに及ぶと、先生は何ともいえぬうれしそうなお顔をなさり、話は止まるところを知りませんでした。退官後はフランスの田舎に隠棲するのだ、と半ば真顔でおっしゃっていたことも覚えております。フランスをこよなく愛されていたと申せましょう。

こうした先生も、後年は、研究所運営の中心的メンバーとして、また学界のまとめ役として、研究以外の面で大層お忙しいお立場に立たれることになりましたが、しかしその一方で、永年手がけられてきた貴族制研究を『六朝貴族制社会の研究』として完成されるとともに、さらに次の隋唐国家の構造の解明にむけて、新たな意欲を燃やされておりました。とりわけ先生が主催された人文研の共同研究、「中国貴族制社会の研究」班では、全体のとりまとめに気を配られるかたわら、終始鋭い問題を提起され、私ども後学に、学問にたいする厳しさと情熱とを無言のうちに示されつづけたのでした。

先生に最後にお目にかかったのは、この三月二十三日、二週間におよぶ中国旅行へ出かけるために、御挨拶を申し上げるべく病室にお伺いしたときでありました。先生は、その数日前の手術のときの麻酔がまだ残り、意識がなおはっきりしないはずのお体であったにもかかわらず、私がお部屋へ足を踏み入れると、すぐに目を明けられ、「いま頃の中国は黄砂の舞う季節だから、体や着るものにはとくに気をつけるように」と、しっかりした口調で申されたのでした。そして退出するとき、普段のごとく大きく手を振られ別れを告げられたのですが、それが永遠のお別れになろうとは、そのときの私には思いもよらぬことでした。おそらく既に死を予感されていたであろう先生から、最後の最後までこのようにお気遣いいただいたことを思うと、私は心に熱いものがこみ上げてくるのを禁じえません。

先生は、生前しばしば、司馬遷のいう「天道、是か非か」の言葉の重みを熱っぽく口にされました。業半ばにしてかくも早く逝かれた先生を前にして、私の胸中にその同じ言葉が重く去来しています。先生には、なお教えていただかなければならないことが多く残されております。しかしそれも、最早かなわぬこととなりました。先生より受けた学恩の大きさをひしひしと感ずる今、私に残されたものは、それに報いるべく、ひたすら精進することにあると決意を新たにし、そのことを先生の御霊前にお誓い申し上げる次第であります。

願わくば、先生、安らかに永眠されますことを。合掌。

一九八四年五月二十日

時禱書

吉田光邦

この春、ニューヨークに出かけた折に、はじめてモルガン・ライブラリーをみることができた。周知のように大財閥モルガン収集の希覯本のコレクションである。また途中寄ったロスアンゼルスでも、ハンチントン・ライブラリーに出かけてみた。ここも希覯書、それにアメリカ史関係の文書を多く所蔵することで有名である。

バロック風に濃厚な装飾で埋められた、モルガン家のホールには、薄暗い光のなかにいくつもの時祷書がならんでいた。華やかな色彩にあふれる細密画でみたされた時祷書は、もちろんヨーロッパの図書館、博物館でよく見かけるものだが、アメリカにもかなり渡ってきている。ハンチントンには、完品、断簡合せて六八種を蔵しているという。そのうち最も美しいのは、十五世紀はじめの二一〇葉から成るもの。精密な花唐草が実にたんねんに描きこまれている。

美しいといえば、ベリー公の時祷書も有名である。これも各

地に蔵されているが、今日知られているものでも十八種は下らない。青や金の色がことにあざやかで、記憶に残る時祷書である。モルガン・ライブラリーもこれを所蔵している。

静かなモルガンの展示室を一巡したあと、売店を眺めていた。クレーブ公夫人カトリーヌの時祷書の複製本がならんでいる。細密画の複製もかなりきれいな仕上りである。この時祷書は、かつてはふたつに分たれていて別々のものと考えられ、美術商の間を動いていたという。ひとつは一九三葉、もうひとつは一六四葉である。前者は一八五六年ごろには一万五千フランであった。モルガンに入ったのは一九六三年だから割に新しい話である。その間、誰の手にあったかは不明である。後者は一九五八年にグェンノル・コレクションに入った。そして研究者の手によって、このふたつは、もとは一部であり、一八五〇年代に分割されたことが知られてきた。佐竹本三六歌仙の断割を思いださせる話である。またその成立年代についても、一四二八年から四五年と、三つほどの説が出ている。

時祷書は中世からルネッサンスに至る間の貴族たちの私的美術として特異なものである。クレーブ公夫人というと、例のラファイエットの小説が思い浮ぶが、そうした心理の動きにも似て時祷書はどれもせんさいに美しい。

大学における男女雇用の平等

小野和子

いささか話は旧聞に属するが、三年あまり前、ユネスコの主催する「女性の教育・訓練・雇用」に関する国際セミナーが日本で開かれたことがある。この各国代表の一行――むろん殆どが女性であった――が、京大を訪問したとき、京大総長の歓迎パーティが京大会館で行なわれた。我われ女性教官もこの席に招かれたのだが、当時、女性教官の数は寥々たるものであった。総長もこれではいささか格好がつかぬ、と思われたのであろう、母と留学生の会の奥様方をも招かれて、何とか数が揃えられていた。

セミナーのテーマであった「女性の教育・訓練・雇用」に関する問題は、我が京都大学にとっても極めて重大な問題である筈であった。だが、これを主体的に受とめる場は、大学内に存在せず、このような形の歓迎となったのである。

それから三年余り、以後も女性教官の数はほとんど増えていない。それは、はたして大学が建前とする実力主義の然らしめる結果であろうか。

学問研究に志ざす女性研究者は決して少なくないが、その多くはまともな研究職につくチャンスにさえ恵まれていない。

「既婚の女性研究者に職が必要だなどとは、考えてみたこともなかった」と述懐されたのは、私の尊敬して止まない、さる教授であったが、このような考え方は、おそらく男性教官のごく平均的なものであろう。男性は社会、女性は家庭とする男女の役割分担についての固定観念が、今なお女性研究者の行く手を大きく阻んでいるのである。それは時に女性自身の内にさえ内面化され、女性自身を縛るものとなっている（最近、女性の側の意識が、問題にされることが多いが、それを培った社会の慣習や教育のあり方を抜きにして、或いはむしろそれを温存しつつ、女性の側を責めるのは、男性の御都合主義というものである）。

近代社会にあっては、男性は、生命の生産と再生産から社会的に切り離され、労働の生産性のみを追求してきたが、その男性によって独占された大学は、学問を極めていびつな形で発展させてきたように思われる。公害や薬害の問題はその一端であろう。したがって大学における性差別の廃棄は、我われ女性の教育・研究の権利に関わる問題であるばかりでなく、学問のあり方や文明の総体に関わってくる問題でもある、と私は思う。

あたかも今、「男女雇用均等法」が、様々に骨抜きされて国会で成立しようとしている。法案の行方がどのようになろうとも、大学は大学で、教育・研究の場にふさわしい男女雇用の平等を追求してゆかなければならないと痛感するものである。

どうぞよろしく

岩熊幸男

英語というものを始めて日常的に用いざるを得なくなった時に、思い知った。始めの内はどうしてもまず、日本語が浮んでくる。するといけない。失語症に近くなる。例え直ちに英訳可能な単純な日本語の場合でもである。一々翻訳していては会話の持つリズムが多分その度に崩れてしまうためであろう。と思い至った時、自分の中の日本語を意識的に抑圧することに努め始めた。そしてまず浮んだ英語をとにかく口にしてみることにした。その結果失語症からは少しく解放されたが、その代りに、場違いなこととか、時には礼を失することすら、口にしている自分に気付くこととなった。何しろ口ばしった事に対する判断は口に出した後にしかできないのである。話相手にははなはだ迷惑なことであった。

それやこれやで、何とか人間並に口をきくようになったのは数箇月もしてからだろうか。たわいない日常会話に関する限り何とかたいした支障もきたさなくなり出した。もっとも、その頃からデンマーク語会話が始まったので、英語の方はそのまま

進歩を止めてしまった。デ語の単語並べをしていると、日本語より英語が出てくる。後にフランスへ行った時は、英語よりデ語が出てきた。いずれ下手くそな外国語を話す場合、それよりちょっとだけましな（慣れた）方が妨害をするものらしい。

さて、そうなってからでも、ヨーロッパ語の中に突然わりこんでくる日本語があった。その一つが「どうぞよろしくお願いします」である。例えば、誰かに自己紹介をした時、愚妻がやってきて研究所で紹介した時、人に何かを頼んだ時、たまたま書いた論文で学位をとっていく気はあるかときかれた時、要件を無事に終えての締め括りに、突然日本語「どうぞよろしく」が頭に浮んで、絶句する。一体これに対応するヨーロッパ語は何だろうか。愚考した所では、そういう言葉はなさそうだ。個々の場合にはともかく、通して言えるヨーロッパ語はない。こう考えた時、単なる《語学力》を離れて、外国語をも、日本的人間関係の中で日本語を話す日本人としてしかあやつっていない自分というものを改めて確認した。

他人の好意を漠然と要請しているらしいこの「どうぞよろしく」に対応するヨーロッパ語は本当に無いか。他の文化圏ではどうか。特に極東諸国ではどうだろうか。もし無いとすれば、「どうぞよろしく」はやはり「日本的人間関係」の何かを反映していると考えてよいだろうか。諸師諸兄の御教示を乞う。

講演

退官記念講演

五九年三月一六日
於　本館大会議室

論理から国家へ

上山春平

この稿は、今年の三月十六日に行なわれた停年退官記念講演の要旨です。

私は、昭和二十九年から五十九年まで、丁度三十年間、人文にお世話になりました。その間に、私の関心が、大まかに言って、論理から国家へと方向を変える結果となりましたので、一応、「論理から国家へ」といったテーマをかかげて、お話してみることにいたしました。

講演に先立って、岩波書店の雑誌『思想』の編集部から、講演を雑誌にのせないか、というさそいを受けて承諾していましたので、当日の録音をただちに文字になおしてもらいました。それにざっと目を通してみますと、話の内容が、大きく三つの部分に分かれていることに気づきました。

第一の部分は、論理から国家への方向転換を、私自身は、何となく哲学からの逸脱と感じていたにもかかわらず、近ごろになってふりかえってみると、必ずしもそうではなく、私が、フランス革命、明治維新、律令国家の成立等に焦点をしぼりながらとりくんできた国家の研究も、やはり哲学の土俵のなかだった、という話。

第二の部分では、私が人文での三十年間にお世話になった共同研究班と私の研究とのかかわりを、桑原武夫先生の主宰されたフランス革命研究班、今西錦司先生の人類社会研究班などを中心に話してみました。

私の関心が、桑原班への参加を通して、論理から国家への転換のいとぐちを与えられ、フランス革命の研究をふまえて、明治維新の研究へ、さらに第二次大戦の研究へと手を拡げるようになったこと、今西班によって、地球的規模に関心を拡げるようになり、原始社会への関心を媒介として、まず、照葉樹林文化にとり

くみ、そこから一転して、日本律令国家の成立に関心を集中するようになったこと、などが主な内容でした。

最後に、第三の部分で、「天皇制とは何か」という問題をとりあげてみました。これは、日本の史実に即して国家の問題を考えようとする私のばあい、日本の国家の特異性を通して普遍的な問題にせまるために、どうしても避けて通ることができないテーマだからです。私は、中国の漢から清にいたる国家の基本的なパターンを、やや乱暴に律令国家としてとらえる観点から、天皇制をそれの日本的変形と見る考えを略述してみました。

本のうわさ

浅田　彰『構造と力　記号論を超えて』
（A5判、二四〇頁、勁草書房）

『逃走論、スキゾ・キッズの冒険』
（A5判、二八三頁、筑摩書房）

ひところ、私は建築模型の製作にこっていた。現実の建築設計は、いろいろわずらわしい条件があって、なかなか思いどおりのことができない。しかし、模型だと好きなことができる。理想的な空間をつくりだせるのである。とくに、模型の場合は、完成後の破壊をエンジョイすることができる。理想的な空間が理想的であるがゆえに解体する。この逆説がもてあそべるのである。じじつ、模型製作においては、完成の一瞬もたのしかったが、それ以上に自分の理想をうちくだいてしまえるという悦楽も大きかった。

さて、浅田さんの本である。私はこれを読んだとき、かつての模型製作の経験を思いだした。浅田さんは、彼一流の資本主義論を構想する。そして、それをマルクス、フロイト、バタイユといったネームの入った積木でくみたてる。そして、完成の直後に、リゾームという一撃で、これを破壊させる。パラノ的な構築の結末にスキゾ的な散乱でけりをつける。あとには、マルクスやフロイトの廃墟が断片と化した砂漠がのこるだけ。いや、じつに壮快な本である。私は、たいへんエキサイトした。曲解も多いとは思うが、ここしばらく、これほど感銘をうけた本はない。

浅田さんはいう。重苦しい学問や主義はあきあきだと。まさに、しかり。重苦しい学問や主義を相手にしていたのでは、こうもみごとな構築はできないし、ましてやかくもあっぱれな破壊はありえない。理想的な構築と、あざやかな、それこそドミノ・ゲームのような崩壊を演出するためにも、議論は積木細工でくみたてられなければならないのである。

浅田さんは、チャートと化した学問をつかって立論した。これは、正しい選択だったと思う。じっさい、建築でも、模型のほうが実物よりはるかに理想を追求しやすい。また、実物は、一度建設してしまえば、それがどんなにひどくとも、たとえ人文研本館であっても（失礼）、建物を維持していかなければならないが、チャートによる積木細工はちがう。浅田さんのすばらしい資本主義論でも解体しうる。さっそうたる積木くずしが可能になるのである。

もう、カンのよい読者は気がつかれただろう。私は冒頭で模型製作の経験を語ったが、これはウソである。私は模型などいちどもつくったことはない。いや、よそう。さらに炯眼な読者は見ぬかれたことと思うが、ほんとうは……なのだ。

こうして、書評という積木細工は崩壊する。もっとも、わざわざ解体させるほどの書評ではないのだが。

（井上　章一）

中村賢二郎編『都市の社会史』

（A5版、三一八頁、ミネルヴァ書房）

以前、光悦の手になる新古今の歌巻を見た。淡い金銀泥の草花の木版が下絵に配され、墨跡とのコントラストが鮮やかだった。その中で、竹を連ねた図柄が目をひいた。紙幅の天地一杯にくり返し刷られていたのは、太い竹の幹のただ二ふしほどの間で、枝さきも根もとも見えない。恰度、狭い横ながの窓を通して数本を眺めたような按配であったが、伝わってくる竹林の深さが面白かった。

この種のデザインは、見る者が竹は如何様に生い繁るかを、あらかた知っているということが計算に入っている。もし竹というものを知らない人があの絵を見れば、紙幅の上下にひろがる空間に何を想像するのだろう。

共同研究班の報告書である本書の十二の章は、聊かこの歌巻の竹に似なくもない。いずれもが断像である。ただ、竹と見立てるには並んでいるものが互いにあまりにも異質ではないか、との意見も出よう。とにかく十九世紀に至るまでの東西にまたがる漠たる時空の中から、あれこれの都市が疎らに選び出され、しかも論法は各人の関心の赴くままとあれば、紙幅から外れた世界はおろか、それぞれの像を横につなぐ共通の空間すら見出せないではないか、という次第。

しかし、あまりにも相異なるはずだと予想された断像群が、はからずも或る共通のイメージをにじませていたなら、それらが全体として伝える世界は、光悦の竹林よりも深い。本書はそのような効果を持っている。

十三世紀の江寧府の養済院に身をよせる老人を扱う太った僧官も、自己の知見の広さと文筆の才を誇る十四世紀のフィレンツェの貿易商も、私生児を娶った同業者を忌み嫌う十五世紀のフランクフルトの織物組合の親方も、金沢に妍を競う十七世紀の遊女も、同じ頃ボルドーで酒税反対とて、お定まりの一揆のフルコースを演じる居酒屋の主人も、竹の一本一本に負けず劣らず、互いによく似ている。いずれも、それぞれの執着ゆえに、都市という人間の集住する空間に一定の均衡を保つのに大いに寄与している。

或る都市が数世紀にわたって存続するという現象は、単にそこの治政や物流の良さだけでは説明されない。二十世紀も末の大都市の入り組んだ管理網の中に暮らす者には、十七、八世紀頃までの聖職者や王侯による都市住民への干渉は何とも素朴に見え、そこにはもっと強烈な混沌が生み出されなかったものかと思われるのだが、このような疑問には、本書の断像群の間にひろがる、都市住民に共通の、とらわれの世界とでも

呼ぶべきものが、答えてくれるだろう。

前近代の諸都市にまたがる或る類似の発見――これは共同研究の刺激的な成果である。この発見は、今まで解かれることのなかった人類史のより大きな謎にせまる道筋をつけるように思われる。謎とは、これまでの人類の主な棲息形態が都市文明以外のかたちに収斂しなかったのはなぜか、という疑問である。

互いに限りなく近似の不安や欲望にかられて都市に集まり棲まう者たちがくり広げる微細な相互分類や強靱な団結、排他の営々たる歩み――本書の様々な断像に付き合ううちに、紙幅の上下にはみ出て語りかける、業障深き生物の滑稽が見えてくる。右の謎を解く第一歩である。観察と思考に必要な、対象への充分な距離感を、この研究班はすでに掌中にしている。七十数度の討論の場でくりひろげられた爆笑の賜物か。

以上、本書が声高には語らなかったところを無理にひき出して称賛した。蓋し贔屓のナントヤラとはこのことか。続篇が俟たれる。そして、それらの諸章を翻訳して東西の読書人たちに語りかけては如何。

（横山　俊夫）

叙位叙勲

○故川勝義雄教授は、四月四日付で、従四位に叙せられ、勲三等瑞宝章を授与された。次いで、四月二十四日付で、正五位に追陞された。

訃報

○川勝義雄教授は、一九八四年四月四日逝去された。次いで、五月二十日午後二時から三時半まで、本館大会議室において、研究所主催の追悼式が行なわれた。

人のうごき

○濱田正美助手（東方部）は、辞任の上、法政大学経済学部助教授に転出。

○森　時彦助手（東方部）は、辞任の上、愛知大学法経学部助教授に転出。

○富永茂樹（長崎大学教養部講師）氏を当研究所助教授（西洋部）に配置換。

○小南一郎助教授（文学部）を当研究所助教授（東方部）に配置換。

○吉川忠夫助教授（東方部）は、教授に昇任。

○谷　泰教授（西洋部）は、一九八三年一二月二〇日伊丹発、ローマ大学、チェルクェト村周辺等で対面的相互交渉に関する研究及び資料収集を終え、一九八四年一月九日帰国。

○濱田正美助手（東方部）は、一二月二一日伊丹発、パリ第五大学トルコ学研究所等で、共同研究の打合せ、並びに資料収集を終え、一九八四年一月一三日帰国。

○吉川忠夫教授（東方部）は、一九八四年二月二九日伊丹発、中国社会科学院、西北大学、四川大学等で中国仏教・道教史の研究及び遺跡に関する資料収集を終え、五月三〇日帰国。

○竹内実教授（東方部）は、三月一日伊丹発、パリ第七大学、ロンドン大学等で現代中国及び現代中国文学の講義並びに資料収集を終え、五月十八日帰国。

○前川和也助教授（西洋部）は、三月十六日成田発、大英博物館、イスタンブール考古博物館等でシュメール行政・経済文書の研究をし、一九八五年三月十五日帰国予定。

○Peter Francis Kornicki 助教授（日本部）は、三月十四日伊丹発、ラトガース大学でのアジア研究会議で研究発表をし、ロンドン大学、ワルシャワ大学等で資料調査及び収集を終え、五月六日帰国。

○梅原郁教授、富谷至助手（東方部）は、三月二四日伊丹発、河南師範大学、杭州大学等で中国研究者との学術交流及び資料収集を終え、四月六日帰国。

○小野和子助教授（東方部）は、三月二五日伊丹発、上海、浙江省社会科学院等で、東林党に関する資料収集を終え、四月八日帰国。

○吉田光邦教授（日本部）は、四月二七日成田発、ニューヨークの The Hybrid Culture Seminar で講演をし、カリフォルニア大学、コーニングガラスセンター等で、資料収集を終え、五月八日帰国。

○狭間直樹助教授（東方部）は、四月一八日伊丹発、北京大学、広東省社会科学院雲南省社会科学院等で、国民革命の研究をし、八月一日帰国。

○多田道太郎教授（西洋部）は、四月二七日伊丹発、上海博物館、西南民族学院、中山記念堂等で、中国西南地区民俗学調査及び資料収集を終え、五月一一日帰国。

○宮嵜法子助手（東方部）は、五月九日伊丹発、合肥での黄山派討論会に出席、北京の中央美術学院、四川省社会科学院、敦煌文物研究所等で中国美術作品調査及び資料収集を終え、八月八日帰国。

外国人客員教官

○Alessandro Valota ピサ大学助教授
農村社会の変容を中心とする日、伊社会構造の比較研究
受入教官　古屋　教授
期間　一九八三年九月～一九八四年五月

招へい外国人学者

○Rembrandt F. Wolpert ケンブリッジ大学研究員
中国貴族制社会の研究班に参加及び唐代の音楽の研究（とくに琵琶）
受入教官　礪波助教授

外国人研修員

○Tucker John Allen ハワイ大学院生
朱子学と中国哲学
指導教官　梅原教授
期間　一九八四年四月～一九八五年三月

○Detlef Köhn ゲッチンゲン大学院生
中国の伝統的な医学
指導教官　山田教授
期間　一九八四年五月～一九八五年四月

○Petersen Jens Oestergard コペンハーゲン大学　アシスタント・レクチャー
中国中世の地方社会の構造
指導教官　礪波助教授
期間　一九八四年四月～一九八五年三月

学士院会員

四月十二日、日本学士院新会員選出会議により、当研究所名誉所員藪内清氏および平岡武夫氏の両氏が新たに学士院会員に選出された。

“DATE”と「デイト」

——漢語方言史における言語層問題班——

平田班長外遊のため、語学には門外漢の私が原稿を書くはめになりました。諸賢の御海容を乞います。

最近の当班の話題はというと、班員マイケル＝シェラード氏の発言。シェラード氏が date と発音すると、日本人学生にはそれが day としか聞こえない。sip, sit, sick と発音してテープにとり、それぞれ [p] [t] [k] の部分を切りとって聴いても、本国人であれば母音の微妙なちがいから区別がつく。その点、テレビの英会話の日本人講師は、[p] [t] [k] をはっきり発音しすぎる、とのこと。

語尾にかぎらず、本国人は母音をたよりに話したり聞いたりし、外国人であればあるほど、子音がどうも気になるらしい。われわれだって日本語ならば、子音のひとつやふたつ落ちても平気だ。ぼんやり電車に乗っていて、駅のアナウンスが「はなくま」というのでびっくりしたら「からすま」だったり、車掌が「つぎは、にしのみやきたぐち」というとき、いくつの子音をちゃんと発音するだろうと考えたりするけれども、たいていはちゃんと聴きわけているから、立派なものだ。

「日産 richan」を「リーチャン」と発音するとさっぱりわからず、「リーチャッ」と発音してやっと納得してくれた南京大学の同学も、古文字学の授業となるとからっきしだめで、ローマナイズされた入声の発音を「ウック」「アット」などとやって涼しい顔をしている。英語の時間も同じ調子でやっているのにちがいない。

カントン語が、われわれの英語のようなみっともない形でないにしろ、入声韻尾の [p] [t] [k] をよく保存していたり、われわれが「敵」「国」のような漢字を、「ストライキ」「コック」などと同じ調子で、「テキ」とか「コク」とかよんでいるのは、できのよいわるいの差こそあれ、外国語あるいはそれにちかいことばとして習いおぼえたものであって、生まれながらの中古漢語の話し手は、そんなダサイことばを使っていたのではあるまい。

五月から来日された北京大学の周祖謨先生が当班に参加されている。当番にあたった班員はとくに中国語で発表をおこなったが、いずれも最も中国語に堪能な方にお願いできたことは幸いであった。

（浅原　達郎）

場面行動の通文化比較

先日チンパンジーの若オスの交尾行動についての発表を、自然人類の早木君が行なった。成オスとメスの交尾ペアは、ときに数日間持続するのに、若オスとメスとの関係はきわめて短かく、オポチュニスティックだと云われている。この若オスとメスとの相互交渉の事例を多く集めた結果、まず若オスは特定のしぐさや音を立てて求愛サインを送る。それに応じメスが近づき、プレゼンテーションをすると、若オスは交尾を達成しうる。メスはその後立ち去ってゆく。ところでこの交尾までの時間を計測した結果、その近傍に成オスがいない時は、一分以内で交尾が成立するケースが多いのに、成オスがいると長びくという。また成オスが遠去かるべくやりすごし、集団から離れることがきっかけになることもあるという。傍にいる成オスの存在が顧慮されて、見る見られる関係下での微妙な相互交渉が予想され、なにかわれわれにも解るといった感をもたせるものだった。

なにも交尾行動に限らず、広く社会的相互交渉というものは、交渉に到る当事者だけでなく、他の周囲の者をも顧慮した、見る見られる相互的読みとりの下で展開されている。われわれはどのようなやりとりを通じて、社会を構成しているか。観察しうる直接的データはこのような相互交渉の流れでしかない。人間のばあいその場その場で消えてゆく身ぶりやしぐさだけでなく、相互に交される言語的発話をも含むのだが、人びとが演ずる相互的やりとりの中に、どのようなコードがかくされているか。特定の発話をするということをとり上げても、そこには言語(ランゲ)レベルのコードとは別個のものが働いており、そこに社会というものを感知させる。きわめて多義的とも云えるこれら観察可能なデーターをどのように処理して、社会的な相互交渉を記述するか。「場面行動の通文化比較」と題して、四年目に入ったが、社会人類学の基本テーマだけに、事はそう簡単でない。ただ掘り出すべき鉱脈への手ごたえは感じられ始めているというのが実感のようだ。

（谷　泰）

((旅))

フランスの旅

竹内　実

娘をつれていった。長くはいられないというので、しばらくは名所見物にであるいた。エッフェル塔も凱旋門もノートル・ダム大聖堂も、てっぺんまで登った。

それから、天野史郎君に電話した。宇佐美斉君から教えてもらった電話番号である。さっそくかけつけてくれた天野君は、パリ暮しに不可欠だからといって、ポケット版の市内地図をわたしてくれた。24.50とエンピツでしるされているのが定価だとわかっていたが、パリ大学の給料はいつ支給されるのか心細い。好意にあまえることにした。

天野君のくるまで、シャンティイ城を訪ねた。みすず、さゆりのお嬢さんもいっしょだった。ガイドが荘重な面もちで、しきりにコンデ公の名をくちにする。年は若いが、ヒゲがさまになっていた。説明がおわると、帽子をひっくりかえしにもってたっている。堂々とわるびれずにチップをもらうのが、またよかった。帰路は白い小さな姫の城にたちより、ひっそり静まりかえった湖畔を散歩、それからルソーが滞在したという村をみた。

気候はまだ寒く、からだがいくらかこごえるような気がしたが、むしろそのために、パリ近郊の雰囲気にひたることができた。パリにむかう道ばたに、一人、二人と子どもが黄色い水仙の花束をもって立っているのも風情があった。片手で握ることのできる、小さな花束である。

案内書の写真をみて、娘はしきりにモン・サン・ミシェルにゆきたがったが、これは、娘が帰国したあと実現した。日本館館長の小堀巌先生ご夫妻に同行させていただいた。小堀先生のお弟子さんの、浜田正之君が運転、要所々々で地理学的説明をあたえてもらった。まずカンカールまでゆき、一泊、翌日、サン・マロの城壁レストランで昼食、そしてモン・サン・ミシェルへだった。帰途、道をとりちがえ、ビットレで夕食というおまけがついた。

四年前モスクワに二カ月滞在したことがあるから、はじめての西洋だとはいえないかもしれないが、しかしまあ、はじめての西洋体験だった。予期しない友人・知己の好意にめぐりあった。お互いに家族連れだったのが、さらに気分をなごやかにしてくれたようである。

襄樊行

吉川忠夫

五月二十一日から二十四日まで、武漢から襄樊へ三泊四日の旅に出た。襄樊は古の襄陽。現在では、漢水をはさんでむかいあう樊城と一つになって襄樊の町を形成している。武漢でやとった自動車は、涓水ぞいに湖北省の平野を西北に進む。収穫をまじかにひかえた麦畑がどこまでもひろがり、遠くには、五月の太陽をはねかえして光る湖沼がつらなる。つぎつぎに通過する孝感、雲夢、安陸、随州、棗陽、いずれもおなじみの地名だ。その距離、およそ三百五十キロ。

襄樊行は、以前の中国旅行のさいにも希望したがかなえられず、今回とくに旅程の一部を変更して、実現したものである。「どうしてわざわざあんなところへ出かけるのですか。何も残ってはいませんよ」。何人かの中国人からそのようにたずねられ、けげんな顔をされた。何もないところへ出かけたがるのは、よほどのもの好きと映るらしい。そういえば、西安でも、大明宮の麟徳殿の遺跡に唐代風の建物を建築中であった。私はなぜ襄樊行に強くこだわったのか。古の襄陽は、中国の北と南の接点の町として重要な位置をしめていた。襄陽と結びついた歴史は私の頭のなかにかずかぎりなくあり、そのような歴史の舞台となり、そのような歴史をはぐくんだ襄陽の風土を、自分の眼でたしかめてみたかったのである。ただそれだけでよかった。

たしかに、現在の襄樊には歴史遺跡とよべるほどのものは何も残ってはいなかった。最大のよびものは諸葛孔明ゆかりの隆中のようだが、そこにある建物はどれもこれもここ数年内に建てられ、映画のオープン・セットを見るようにやすけないものばかりである。まる一日を隆中見物と隆中管理処における座談会にあてられた私はすでにいささかいらだち、その翌朝、水道公司内のいまできの庭園に案内されるにおよんで、いらだちは頂点に達した。だが、そのようにいらだっていた私も、漢水の岸にたち、その上流を指さして、「あのあたりが王粲が住んでいたといい伝えられるところです」と教えられたとき、十分に慰められ、なつかしい想いがこみあげてくるのであった。襄樊で見る漢水は下流の武漢で見るそれよりいちだんと川幅がひろく、悠々と流れていた。私にとって、何もないどころではなかったのである。

袖下の失敗

ピーター・コーニッキー

日本人の旅行者が、外国へ行く時、チップのことで悩むという話は、何度も聞いたことがある。チップが全くいらないという有り難味で恵まれている日本だから、確かに、いきなりそのことに気を付けなければならないようなことになったら、当惑するのが当たり前だ。しかし、国によって、チップの相場が違っており、まただれにいくらというチップのルールも違うので、チップが必要な国の人も、海外に行った時、チップのことで必ずしも気軽とは言えない。まして袖下、或いは悪く言えば賄賂、を使わなければならないような羽目に陥ったら、少し頭を悩ましてもおかしくはないのである。

今年の四月にポーランドに行った。父の母国なのに、私にとって初めての旅だった。ワルシャワ大学の日本学科で講演したのち、講師のヘンリックさんが、「鉄の意志」というショパンの生まれたところまで案内してくれた。車で一時間以上かかったが、残念ながら門が締まっていた。それは、国の役所で必ず仕事が三時に終わるからだったそうである。ヘンリックさんはびくともせずに、あたかもごく当然のことのように、紙幣一枚を出し、それを振り動かしながら見回り役を呼びよせた。手早く札をポケットに入れ、見回り役が門を開けてくれた。なるほど、と思った。

数日後、夜おそく、地方からワルシャワに戻った。駅から出て、例の文化宮殿の前で、タクシーを待っている人の列に並んでみた。三十分たってもタクシーが一台しか来なかった。流しは多かったが、客を乗せたがらないのか、なかなか停まらないし、まわりに客を乗せないまま、停まっていたタクシーもあった。待ちに待ったあげくもう腹が立ってしまった。列に並んでいる人々に悪かったが、ヘンリック式でいくことに決めた。勇気を振るい起こして停まっていたタクシーに近付いた。行き先までの距離を考えて、五ドルの札を運転手に見せ、片言まじりのポーランド語で話を付けた。うまく袖下を使った、と自慢顔をしてタクシーに乗った。しかし、不思議なことに、運転手は、非常に丁寧な態度を取り、ラジオは大きすぎないでしょうか、たばこいかがでしょうか、と愛想よくもてなした。やはり、札を出しすぎたのである。ヘンリックさんは、それを聞いて、相場の五倍くらいだった、と笑った。

おくりもの

。一九八三年度の人文科学研究協会研究助成金は、次の両氏におくられ、二月一六日（木）に当研究所応接室に於いて贈呈受賞式がおこなわれた。

1　野田正彰　（谷教授推薦）

2　山森稔子　（前川助教授推薦）

錯乱の文化・精神医学的研究
――症候群からみた都市と農村――

野田正彰氏は北海道大学医学部精神神経科を出てのち、おもに滋賀県長浜赤十字病院に勤務し、分裂症患者の妄想体験を個々のケースにあたって刻明に記載し、かつ患者をとりまく家族、そして地域社会内での社会的力動関係、そして象徴的文化特性を理解することで、治療を行った経験の持主である。その成果はたとえば共著『錯乱と文化』として結実しているが、同氏はたんに治療という実際的目的にとどまらず、論文「初老期被罰症―社会・文化精神医学の課題といわゆる初老期精神病への接近―」といったものにもうかがえるように、患者をとりまく社会・文化的背景から、錯乱的な症候を解析し、逆に当該社会の文化的特性を照射する作業を行なっている。この種の研究は、文化人類学での憑依の表現形式の分析にも大きく係わっており、民族学界においても、注目されている。

また、同氏は昨年より、たんに錯乱におち入った患者自体への注目から、さらにより広い社会・文化的背景を、都市と農村との対比の上で明らかにすることへと焦点をひろげ、日赤の職を辞して、研究に専念されている。

（谷　記）

「ヒエログリフを読む会」の主宰、『クヌム』編集・論文執筆による古代エジプト研究の推進

山森稔子さんは十五年以上も前から古代エジプトのヒエログリフに魅せられ、数人の仲間とともに私的な勉強会「アンク・ジェトの会」を続けられて来た。山森さんはエジプト現地を見るという夢の実現のために、上京区で旅館経営をはじめられたという熱意の持主であって、一九七九年からは「ヒエログリフを読む会」を組織された。毎月一回、約二〇人のメンバーが各地から山森さんの経営する旅館に集まり、ヒエログリフの講読を続けて

いるのである。

さらに山森さんは一九八三年には、「ヒエログリフを読む会」メンバーのうち六名の論文を集めた研究雑誌『クヌム』一号を編集され、山森さんも「古代エジプトにおける文学作品の所在と研究文献について」という堂々たる論文を寄せておられる。『クヌム』一号は、各執筆者が原稿を浄書、ゼロックス・コピーし、全論文を仮製本することによって成立したものである。収録されている他論文は以下のとおり。「古代エジプト第一中間期」(西村洋子)、「古代エジプトの第十一王朝の興隆と崩壊」(萩生田憲昭)、「王とスポーツマンの時代」(宮本純二)、「ハトシェプスウトの王権」(木戸裕美)、「第一王朝の『外国製土器』について」(宇野かをる)。

研究者が増加し、また現地発掘も成功するなど、わが国の古代エジプト学は近年にいたって新しい段階に入ったようにみえる。このような状況のもとで、山森さんが果して来た役割はまことに大きい。大学・研究所での専門研究は、研究に関心を寄せる広汎な人々の存在があって、はじめて健全なものになりうる。山森さんの「ヒエログリフを読む会」は、古代エジプトを理解しようとする人々を広く組織した、わが国唯一の集まりなのであって、わが国のエジプト研究を支えていくために、もはや不可欠である。また山森さんの組織は、エジプト学研究者を養成する役割をも果しつつある。たとえば、「ヒエログリフを読む会」の講師役をつとめる小山雅人氏は、もともとは山森さんらの「アンク・ジェトの会」の仲間であって、のちパリに留学して専門家となったのである。さらに関西大学などでエジプト学の訓練を受けた幾人かが『クヌム』一号論文の執筆を行なったのであって、「ヒエログリフを読む会」は、エジプト研究を継続しようとしている若い人々のために、もっとも良き集まりの場となっている。

『クヌム』一号の山森論文は、世界各地の博物館などに所蔵されているヒエログリフ・文学作品をリスト・アップし、作品内容を紹介するとともに、それぞれについての研究論文目録を作成したものである。このような邦語文献は他になく、こんご研究者のための基礎文献となることは確実である。

(前川記)

お客さま

一九八四年二月七日

韓国　聖心女子大学仏語仏文学科教授　鄭　明　煥

二月二七日

中国社会科学院図書資料管理考察団

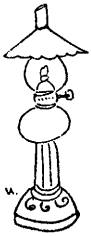
〃　副秘書長　孫　耕　夫

〃　情報研究所副所長　石　健
〃　経済研究所副研究員　劉　琢玉
上海社会科学院情報研究所副研究員　周　銘徳
中国社会科学院哲学研究所副研究員　王　世仁
〃　経済研究所助理研究員　張　沢厚
〃　情報研究所助理研究員　莫　作欽
〃　外事局幹部　李　薇
〃　〃　丁　謙

三月九日
上海社会科学院歴史研究所副所長　湯　志鈞
（講演題目：史料的鑑別和整理。なお、十一日の楽友会館での講演題目は、中国近代経学的特点。）
三月十五日
上海社会科学院法学研究所副研究員　斉　乃寛
（講演題目：中国の近代建設と法学遺産。）

書いたもの一覧

一九八三年十二月～一九八四年五月
（五十音順、◉印は単行本）



・浅田　彰
翻訳・ドゥルーズ『野生のアノマリー』（ネグリ著）への序文　現代思想　一二月号
スピノザの現在　同　一二月号
パラドクサの方へ　同　一二月号
「自己組織化」をめぐって　理想　一月号
病いの詩学／病いとしての詩学　現代詩手帖　二月号
フェルメール　光の充溢　現代思想　三月号
◉逃走論　筑摩書房　三月

書評・塩沢由典『数理経済学の基礎』　数学ブックガイド100　四月
F・Bの肖像のための未完のエスキス　海　五月号
・浅原達郎
孔廟礼器碑（『中国碑帖選　訳注』上）　玉林堂　三月
蔵品より　競卣　泉屋博古館紀要　一　三月
・飛鳥井雅道
天皇―前半と後半をつらぬくもの　現代の理論　一月
青年像の転換　世界　二月

中江兆民全集第一〇巻書評　部落解放　二月
長崎で開眼した仏学の途・中江兆民　歴史と人物　三月
日本「近代化」の評価をめぐって（対談）　歴史公論　三月
近代概説および史料校訂　『史料京都の歴史・5・社会文化』　平凡社　三月
戊辰戦争従軍の庶民　人文　三月
兆民・伝承と事実（中江兆民全集第七巻月報）　岩波書店　四月
壮士・志士仁人・主義者　季刊日本学4　四月
・**荒井　健**
李義山七律集釈稿㈢（共筆）　東方学報　五六冊　三月
・**井上章一**
鳥と芸術　建築美・極一　四月
・**岩熊幸男**
Instantiae Revisited, in *Cahiers de l'Institut du Moyen-Âge Grec et Latin*, 44, 1983, Copenhagen
Instantiae and 12th Century "School" (co-author, Sten Ebbessen), *Ibid.*, 44, 1983, Copenhagen.
・**上山春平**
◉国家と価値（編著）　京都大学人文科学研究所　三月
・**宇佐美　斉**
LES *ILLUMINATIONS* ET LA PEINTURE　ZINBUN (Number 19)　一二月
現代の詩人6・清岡卓行（編・鑑賞執筆）　中央公論社　一二月
翻訳・イヴ＝マリー・アリュー　真の国際化とは何か　福岡ユネスコ通信　三月
ボードレール『悪の花』パリ情景詩篇・酒詩篇註釈（共筆）　人文学報　五六号　三月
◉フランスの文学（共著）　有斐閣　四月
翻訳・イヴ＝マリー・アリュー　UN SPECTACLE AMUSANT　ふらんす　一二月～三月
日ノ往シ方（上・下）　言語生活　四月～五月
・**梅原　郁**
◉中国近世の都市と文化（編著）京都大学人文科学研究所　三月
南宋の臨安（『中国近世の都市と文化』）　東方学報　五六冊　三月
宋代の武階
・**久保由美**
近代文学における叙述の装置――明治初期作家たちの〝立脚点〟をめぐって――　『文学』　四月号
・**ピーター・コーニッキー**
中之島図書館の旧貸本屋蔵本　なにわづ　九二号　三月
・**阪上　孝**
監視と規律―近代化と家族　『思想』　二月号
・**佐々木　克**
最後の将軍・徳川慶喜と戊辰戦争（『徳川慶喜のすべて』）

◉志士と官僚　新人物往来社　五月

・桑山正進

Buddhist Temples in Taxila and Gandhāra : A Historical Review of Monastic Arrangements, in *Catalogue for the Exhibition of Gandhara Art of Pakistan*, NHK,　二月

見る仏教—ガンダーラ展によせて—　新美術新聞　三五六号　二月

ガンダーラ美術と遊牧族㈠　オリエント通信　二一号　日本オリエント学会　三月

バーミヤーン私注　建築史学　二号　四月

ガンダーラ美術と遊牧族㈡　オリエント通信　二二号　五月

・小南一郎

楚辞理解の立場——汪瑗「楚辞集解」の出版によせて——　同朋六八号　二月

◉中国の神話と物語り——古小説史の展開——　岩波書店　二月

漢字の基本構造とその展開　科研費成果報告書「漢字の計算機による処理に関する総合的研究」所収　三月

◉翻訳・夏鼐著　中国文明の起源　NHKブックス　四月

・杉山正明

クビライと大都『中国近世の都市と文化』　人文研　三月

・竹内実

対外貿易と精神汚染　京都新聞　一二月二〇日

まつ毛のある魚　京都の労働経済　一月号

中国農村の変貌　京都新聞　二月一五日

解説〔地の群れ、ほか〕（井上光晴長篇小説全集十四）　福武書店　五月

◉中国生活誌—黄土高原の衣食住（共著）　大修館書店　三月

・多田道太郎

わが胃腸文明論　共同通信社（配信）　一二月

ストレスにかかったネズミ　潮　一月

ボードレール『悪の花』パリ情景詩篇・酒詩篇註釈　人文学報　三月

からだ百面相（一）　共同通信社（配信）　五月

・田中淡

中国の住まい—奥行の指向　月刊百科　二五六号　二月

◉紫禁城宮殿（監修・翻訳）　講談社　二月

大陸系建築様式の出現（『全集日本の古寺・第一〇巻・法隆寺と斑鳩・生駒の古寺』）　集英社　四月

中国住宅の類型（杉本尚次編『日本のすまいの源流—日本基層文化の探究』）　文化出版局　五月

討論・東南アジアのすまい、ほか（同右）　同右　五月

・谷泰

The Two Deaths of Jesus　ZINBUN (No. 19)　一二月

ユーラシア西南部有畜社会の比較文化的研究——海外調査より——　学術月報36・9　一二月

文化人類学の立場から『海外学術調査コロキアム―地域研究と言語』所収　海外学術調査総括班　三月

・角山　栄

「時刻」を知った日本人　中央公論　一二月

一杯の紅茶から　PINUS　一二号　一二月

大阪の「時の鐘」　遠やまびこ　一二月

時間でみた日本人　サンケイ新聞　一月一二日

産業革命期のロンドン　高校通信東書　九七号　一月

◉時計の社会史　中公新書　一月

クイズに出た「シンデレラの時計」　大阪消防　二月

書評・川北稔著『工業化の歴史的前提』　週刊読書人　二月一三日

ニューメディア時代をどう生きる　サンケイ新聞　三月二三日

明治初期、海外における日本商社及び日本商人――明治一七年明治二二年の調査を中心として――（竹中靖一先生退職記念『社会経済史の諸問題』）　近畿大学商経学会　三月

社会史ブームの背景――生産視点から消費視点へ――　聖教新聞　四月五日

アジア間米貿易と日本（『社会経済史学会第五三回大会報告要旨』）　第五三回大会準備委員会　成城大学　五月

・礪波　護

唐宋時代における蘇州（『中国近世の都市と文化』）　京都大学人文科学研究所　三月

・富永茂樹

美術館の誕生（井上俊編『地域文化の社会学』）　世界思想社　二月

ネクラの社会学　京都新聞　四月二七日

・富谷　至

『中国碑帖選　訳注』上（共訳）　三月

『書学大系・碑法帖篇』第八巻「石門頌」（共著）　五月

・狭間直樹

辛亥革命時期的階級対立（『紀念辛亥革命七十周年学術討論会論文集』下冊）　中華書局　六月

国民革命中の二つの五四記念日（『五四運動の研究』第二函附録）　同朋社　一二月

・蜂屋邦夫

中国の死生観（東京大学教養講座『生と死』I）　東京大学出版会　一二月

書評・福永光司編『中国中世の宗教と文化』　東洋史研究　四二巻三号　一二月

老荘思想と空　理想　三月号

◉儀禮士冠疏（編）　東京大学東洋文化研究所　三月

・林　巳奈夫

◉『殷周時代青銅器の研究――殷周青銅器綜覧一――』（京都大学人文科学研究所研究報告）　吉川弘文館　二月

「所謂饕餮役は何を表はしたものか――同時代資料による論

証――」　東方学報　五六冊　三月

・**樋口謹一**

書評・色川大吉編「水俣の啓示――不知火海総合調査報告――」上・下　潮　三月

京都人のイケズ！（道標）　京都市政調査会報　五月

・**平田昌司**

『皇極経世声音唱和図』与『切韻指掌図』　東方学報　五六冊　三月

・**藤井譲治**

〝郷帳〟覚書　歴史地名通信創刊号　一月

遺領分知における大名意志　『近世的支配体制形成期の基礎研究』所収　三月

・**宮崎法子**

「西湖をめぐる絵画――南宋絵画史初探」（『中国近世の都市と文化』）　京都大学人文科学研究所　三月

・**麦谷邦夫**

道教の北斗信仰　月刊百科　二五五号　一月

・**柳田聖山**

今月のことば　花園　一二月―五月

禅語コーナー　花園　一二月―五月

金山穆韶老師のこと（『柳田謙十郎、人・思想・行動』）　学習の友社　一二月

老舎の「茶館」　日中文化交流　三五五号　一二月

雁の寺　読売新聞　一二月

曽我量深先生を想う　同朋　三九三号　一月

牛を桃林の野に放つ　清泉　一三号　一月

◉『祖堂集索引』下冊　京都大学人文科学研究所　二月

無字のあとさき　理想　六一〇号　三月

禅仏教の時間論（講座『日本思想』第四冊）東大出版会　四月

子規夜啼いて山竹裂く　清泉　第四一号　四月

道元と中国仏教　禅文化研究所紀要　第一三号　五月

・**矢淵孝良**

十七帖ほか（『中国碑帖選訳注』上）　玉林堂　三月

謝霊運山水詩の背景　東方学報　五六冊　三月

・**山下正男**

空の論理学　理想　三月

正義と権利――西欧的価値観の歴史（上山春平編人文研刊『国家と価値』所収）　三月

城・聖域・所有権（上山春平編人文研刊『国家と価値』所収）　三月

・**山田慶児**

学問日本化の方法序説――吉益東洞『薬徴』の帰納法について（上・下）　UP　一～二月号

鏡を介しておのれと世界を見つめた人――『朝永振一郎著作集』全一二巻　朝日ジャーナル　二月一〇日号

・**山本有造**

大隈財政の本態と擬態　梅村又次・中村隆英編『松方財政と殖産興業政策』国際連合大学・東大出版会　一二月
明治前期財政統計における金・銀・紙混計問題について　同右　一二月
「旧日本帝国」の域内・対外貿易マトリックスの作成（溝口敏行と共筆）　経済研究　三五巻　一号　一月
Capital Formation in Taiwan and Korea (with T. Mizoguchi) R. H. Myers and M. P. Peattie (eds.) *The Japanese Colonial Empire ; 1895-1945*, Princeton Univ. Press, 1984.　一月
「幕末在留西洋人人名録」のこと　毎日新聞（夕刊）二月九日

・**横山俊夫**
日本人必携の辞書であった節用集から現代へのメッセージ　中央公論　二月
節用集에 現代이 보내는 에시지　일본의 배아리（京城）八号　三月
節用集と日本文明（梅棹忠夫・石毛直道編『近代日本の文明学』）　中央公論社　五月

・**吉川忠夫**
五、六世紀東方沿海地域と仏教——摂山棲霞寺の歴史によせて——　東洋史研究　四二巻三号　一二月
蜀における讖緯の学の伝統（安居香山編『讖緯思想の綜合的研究』）　国書刊行会　二月

◉六朝精神史研究　同朋舎　二月
『史記』の魅力（高校用総合古典『学習指導の研究』）　筑摩書房　三月

・**吉田光邦**
民族と技術　リトルワールド　一月
数寄の表現　淡交　増刊号　一月
兵制統一過程の一考察　「幕末の洋学」　一月
京都の工芸　「茶の湯京都」　二月
未来の語り方　室内　二月
アートジャパネスク18（編著）　講談社　三月
測る文化史　鉄　三月
日本人と桜　花の友　三月
桜の名品　季刊グルメ　四月
出会いの茶器（対談）　淡交　四月
京の生麩　旅　四月
意匠にみる松竹梅　太陽　四月
Foreign Images of Japan　Sumitomo Quarterly　四月
地域文化と都市公園　公園緑地　五月
ハイブリッド・カルチュア　マツダK・K　五月
耽書さまざま　染織α　一二〜三月
技術史の断面　三省堂ブックレット　一二、二、四月
やまとの文庫　天理時報　一二〜五月

人文
第三〇号　昭和五十九年十月三十一日
京都大学人文科学研究所発行
明文舎印刷㈱
非売品